

福岡県東峰村に立地する水神と災害との関連性

櫻田, 歩夢
九州大学大学院工学府

西山, 浩司
九州大学大学院工学研究院環境社会部門

清野, 聡子
九州大学大学院工学研究院環境社会部門

<https://hdl.handle.net/2324/7183017>

出版情報 : Journal of Japan Society for Natural Disaster Science. 39 (2), pp.137-155, 2020.
Japan Society for Natural Disaster Science
バージョン :
権利関係 : © 2020 Japan Society for Natural Disaster Science



福岡県東峰村に立地する水神と災害との関連性

櫻田 歩夢¹・西山 浩司²・清野 聡子²

RELATIONSHIPS BETWEEN WATER GODS AND DISASTERS IN TOHO-VILLAGE, FUKUOKA, JAPAN

Ayumu SAKURADA¹, Koji NISHIYAMA² and Satoquo SEINO²

Abstract

This study investigated relationships between water gods and disasters in Toho-Village, Fukuoka, Japan, through the survey of geographical location of water gods, the interview with local residents on features of water gods, and the extraction of historical records of disasters that occurred in Toho-Village. The results are as follows. 1) Approximately 80 % of water gods are located in disastrous sites damaged by floods and debris flows. 2) The water god located near Den Mountain with steep slopes was related to debris flow and associated river flooding disasters that have been repeatedly caused in the long history. Therefore, through the inclusion of these results into the message of the water god, it can be expected that the water god will be useful as the monument of local disaster protection.

キーワード：水神，災害，土石流，河川の氾濫

Key words: water god, disaster, debris flow, river flooding

1. はじめに

近年、東日本大震災や西日本豪雨など深刻な災害が頻発していることから、住民が地域の災害の危険性を認識し、災害時の安全確保や避難行動に繋げることを目的に、地域防災に関わる共助の取り組み（防災訓練、災害学習会、防災リーダー育

成など）が各地で盛んに行われるようになってきた。その取り組みの一環として、地域に残る災害の記憶を風化させないために、災害の記録や伝承を編纂して後世に伝える仕組みを作っていくことは、地域特有の災害を具体的に把握して将来の災害に備える意味で極めて重要である。最近では、

¹ 九州大学大学院工学府
Graduate School of Engineering, Kyushu University

² 九州大学大学院工学研究院環境社会部門
Department of Urban and Environmental Engineering,
Faculty of Engineering, Kyushu University

本報告に対する討議は2021年2月末日まで受け付ける。

何世代も前に起こった災害と関連する石碑、神社、水神などの地域遺産に着目し、それらの防災上の役割を調査して、今後の防災に有効活用することを目指した研究や取り組みが注目されている。

歴史的に土石流が頻発する広島県では、当時の土石流災害や水害の記録を伝える石碑が過去の災害の被災地内（河川沿いなど）に建立されている¹⁾。その中で、2018年の西日本豪雨の被災地である広島県坂町小屋浦地区にも石碑が存在している。その地区では、明治時代の1907年に土石流を伴った河川の氾濫で46名の犠牲者を出す災害が発生し、その様子を伝える石碑が1910年に建立されている²⁾。それから約100年経過した2018年に15名の犠牲者を出す深刻な災害が再び発生した。広島県の石碑の記載内容³⁾を確認すると、復旧を記念する石碑、犠牲者を慰霊する石碑、災害の経験と教訓を次世代に伝える石碑など建立意図は様々であるが、共通して当時の災害の様子が記されている。従って、現存する石碑は今日の防災にも重要な役割を果たすことができる貴重な遺産と言える。石碑の防災への活用例を見ると、石碑のある地域の公民館で災害の追悼式に併せて災害訓練を実施した取り組み¹⁾や、徳島県の防災教育の一環として、小学校の高学年の生徒が低学年に津波に関する碑文の読み聞かせを行う取り組み⁴⁾などがある。また、現在、自然災害伝承碑に遺された過去の貴重なメッセージを地域の防災に活かすことを目的に、各地の伝承碑を登録する取り組み（国土地理院）も行われている⁵⁾。

また、神社も防災上の役割を果たす側面を持っている。例えば、2011年3月11日、東日本大震災の際、海岸線近傍の高台に立地した神社は津波の被害を受けず、その後避難所として活用された。これは、地域住民が数世代にわたり津波の状況を記録し、安全な場所に神社を祀ったためと推測される⁶⁾。また、宮城県の仙南平野では、神社が水害に対して安全な微高地上に立地していることもわかった⁷⁾。さらに、洪水から集落や耕地を守るために周囲を堤防で囲んだ輪中集落にも、防災の役割を持つ神社が存在する。岐阜県安八郡輪之内町の上大博地区では、水害を避けるために、家屋

よりも高い位置に穀物や家財道具などを保管、貯蔵し、避難場所としても使われる水屋、そして、盛土して小高くした助命壇が設けられているが、その地区に鎮座する神明神社も盛土されており、助命壇としての機能を持っていた⁸⁾。このように、避難場所などの立地面で防災上の役割を担っている神社が存在していることがわかる。

一方、水神に関しても、石碑や神社と同様に防災上の役割を担うことができないだろうか？これが本研究のテーマである。まず、水神の存在意義とは何かについての知見を紹介する。水神とは、水に関係するキーワード（洪水や渇水等の付く言葉、井戸、川、池など）に対して具体的な役割と影響力を持つ存在で、龍神、蛇、河童などが水神の主体として挙げられる⁹⁾。その役割と影響力から水神信仰の種類¹⁰⁻¹²⁾を挙げると、飲料水の守護神としての水神、灌漑用水に関わる水神、雨乞いの役割を持った水神、水難除け・防水の神としての水神、大漁や漁業の安全に関わる水神、河童の伝承と関わる水神など多岐にわたる。そのため、水神の性格を一括して述べることができない¹³⁾。従って、水神の防災への活用を考える際には、水神が災害と関連して祀られているのかどうかを地域住民から得られる情報に基づいて判断することが必要になってくる。

ここで、災害と関連する水神はどんな特徴を持っているのかについて調べた既往研究を紹介する。茨城県では、久慈川、鬼怒川、霞ヶ浦、北浦など河川、湖沼の岸に水神の祠が多く、洪水の難から村を守る神として祀られている¹⁴⁾。また、静岡県大井川下流域では、水防の神として水神を祀り、洪水の被害が大きい場所に水神社が多く祀られている¹⁵⁾。さらに、輪中集落でも、決壊地点に水神社や決壊守護神（水神）が祀られている¹⁶⁾。その他、水神が伝説と繋がっている事例もある。利根川布鎌地区では、水神様が白馬に乗って堤防を見回ったおかげで洪水の難から逃れることができたという伝説が残っており、堤防の守護神として水神が祀られている¹⁷⁾。

以上の事例研究は、過去に氾濫を繰り返してきた河川の中流域や下流域に祀られた水神に関する

もので、その報告例は多い。一方、土石流を含んだ氾濫の危険性がある河川上流域の谷筋にも水神が祀られている¹⁸⁾。しかし、河川上流域の水神と災害との関連を調べた既往研究については、著者が調べる限りでは見当たらない。河川上流域の中山間地が豪雨発生時に最も早く被害を受ける場所に位置することを考慮すると、その地域の水神と災害との関連性を明らかにすることは、その地域の人々が災害とどのように向き合ってきたのかを知る上で意義が大きいと考えられる。また、水神を地域防災に活用する際には、水神が神社のように由来がはっきりしていないこと、また、石碑のように文字情報としてのメッセージを持っていないことを考慮すると、地域住民の協力を得ながら、水神建立の経緯やそれと関連する災害の歴史を十分調査した上で、防災に役立つメッセージを新たに構築することが必要になってくる。

そこで本研究では、筑後川の上流域で、平成29年7月九州北部豪雨の被害を受けた福岡県東峰村とその隣接地域に祀られる水神を対象に、1) 現地調査から水神の立地特性を把握し、現地住民に対するヒアリング調査、及び、地域の災害に関する歴史文献調査を通して、水神と災害との関連性を調べる。また、2) その結果に基づき、水神に

持たせる防災上のメッセージの内容について考察する。

2. 研究の対象地域

研究対象地域である福岡県東峰村(図1)は、2005年に旧小石原村と旧宝珠山村が合併して発足した自治体で、筑後川北側に位置する中山間地域である。東峰村は、その86%を山林原野が占めており、標高500~900 mの急峻な山地に囲まれた地域である。また、東峰村の西側には大肥川、東側には宝珠山川が流れている。平成29年7月九州北部豪雨の際には、山地部の土石流の発生だけでなく、流木を伴った大肥川と宝珠山川の氾濫も起こって深刻な災害となった。

また、東峰村は古い歴史を持ち、多くの貴重な遺産が存在する地域であるが、過疎化と高齢化の影響で地域を維持することが難しくなっている。その現状を踏まえ、災害に関連した言い伝えや先祖代々伝わってきた災害の経験などを拾い上げて記録に残すことを目的に、地域に残る水神の調査を実施してきた。これは、過去の災害を風化させない取り組みの一環である。

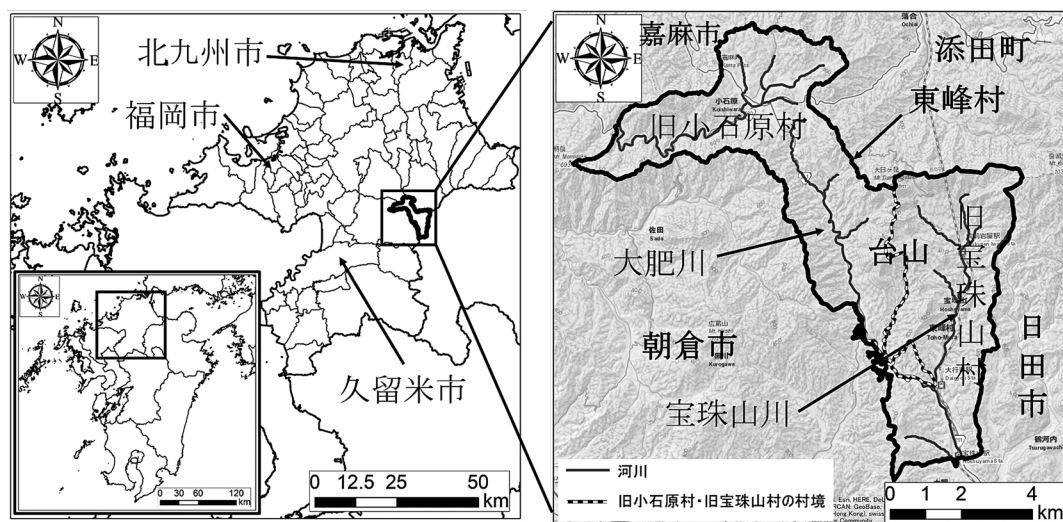


図1 調査対象地域(福岡県東峰村)

3. 研究方法

3.1 水神の立地特性に関する現地調査

水神の立地特性を把握するために、2018年10月～2019年5月にかけて、ハンディ GPS (GARMIN 社) を使用し、水神の位置座標を特定する現地調査を行った。その際、協力して頂いた地域の郷土史家による知見で知りうる限りの水神を調査した。東峰村には過去の災害等で消失した水神も存在し、その位置も記録した。

その後、ArcGIS 10.6 (ESRI 社) を使用し、電子国土基本図 (国土地理院) を背景に、水神の位置をプロットし、土砂災害危険箇所、土砂災害警戒区域を重ね合わせ、その立地特性を把握した。また、水神が立地する谷筋の特徴を把握するために、国土地理院数値標高モデル10m メッシュデータを使用した。

3.2 水神に関するヒアリング調査

本研究では、東峰村とその隣接地域に祀られる水神の伝承や役割、そして、水神が地域の人々にとってどのような存在なのかを知るためにヒアリング調査を実施した。調査期間は、2018年10月～2019年5月で、郷土史家を含む24名の現地の方々からヒアリングを行った。その実施内容を表1に示す。

その調査では、最初に、東峰村の郷土史に詳しい仲道光男氏 (郷土史家) から現地に祀られている水神に関する情報を提供して頂いた。また、現

地の郷土史家2名 (表1の郷土史家 A, B) の方々からも協力が得られた。その後、現地の水神についてヒアリングを実施するため、仲道光男氏に依頼して、水神祭主催者や水神管理者の紹介、水神が祀られている場所への訪問、東峰村役場と公民館での集会の手配などをして頂いた。ヒアリングは、1対1や1対多数という形で実施し、雑談形式で音声を録音した上で水神の情報を取り出した。その結果、5節で述べる4箇所の水神に関して情報を得ることができた。

3.3 東峰村の災害に関する歴史文献調査

ヒアリング調査から災害に関連することがわかった水神については、災害の特徴を把握するために文献調査を行った。ここでは、江戸時代以前の災害の記録を抽出するため、主に福岡県内の古文書、古記録を収録した『福岡県近世災異誌』¹⁹⁾を使用した。明治時代以降では、東峰村の災害史に関する記載がある『宝珠山村誌』²⁰⁾と『小石原村誌』²¹⁾から抽出した。一方、宝珠山村と小石原村が合併して東峰村になった2005年以降の主な災害は、平成24年7月、及び、平成29年7月九州北部豪雨で、気象庁、内閣府、東峰村などの最近の資料²²⁻²⁷⁾に基づいて特徴を把握した。

4. 水神の形態と立地に関する特徴

東峰村とその隣接地域では、合計14箇所水神が確認された。本節では、それらの水神がどのよ

表1 ヒアリング調査の詳細

調査日	情報が得られた水神	実施場所	時間	参加者性別	参加者属性
2018/10/24		竹地区個人宅	10:30-11:30	男性4名	竹地区住人3名、仲道光男氏
2019/1/29	葛生、桑鶴、原 (表2のNo.1)	東峰村役場 宝珠山庁舎	11:00-12:00	女性2名 男性5名	郷土史家A, B、葛生地区水神管理人、桑鶴地区住人 (高木神社総代含む)、陶器製作者A、仲道光男氏
2019/2/20	小石原村誌と宝珠山村誌に記載された水神に関する情報提供	大行司地区個人宅	11:00-12:00	女性2名 男性1名	郷土史家A, B、仲道光男氏
2019/4/15	桑鶴	桑鶴地区個人宅 蔵貫地区窯元	11:00-11:30	男性2名	陶器製作者B、仲道光男氏
		蔵貫地区	11:30-12:00	女性2名	蔵貫地区住人2名
2019/4/25	原 (表2のNo.1)	原地区公民館	10:00-12:00	女性10名 男性3名	原地区住人9名 (原地区水神祭主催者含む)、郷土史家A, B、東峰村役場職員、仲道光男氏
2019/5/24	白岩	白岩地区個人宅と 白岩地区水神現地	10:00-12:00	男性3名	白岩地区水神管理人、白岩地区組合長、仲道光男氏

うな形態で、どのような場所に立地しているのかについて調べる。ここで、表2に各地区の水神の属性、写真1～10に水神の形態、図2に水神の分布、図3に各地区の水神周辺の地形的な特徴を示す。また、それらの図表の中のNo.1～14は、地区ごとの水神番号を示す。

4.1 水神の形態

表2に示すように、石が水神の御神体になっているものが多い。その形態を見ると、写真1（桑鶴地区、No. 3）のように、単独の石が御神体になっているもの、写真2（栗林地区、No. 8）のように、大小様々な大きさを持つ複数の石が御神体になっているものがあった。また、高さ1 mを超える石碑のような御神体（写真3、原地区、No. 11）や、木像のようなものが石と一緒に祀られている御神体（写真4、日田市清水本地区、No. 14）もあった。

地元の人の話では、御神体の石は周囲にあったものを運んできたものだろうと話していたが、詳細はわからなかった。

石以外では、明治時代の廃仏毀釈の際に不動明王に置き換わったと言い伝えられている御神体（写真5、鶴地区、No. 2）、石碑とともに弁財天として祀られている御神体（写真6、7、葛生地区、No. 5）があった。それらの御神体が、誰によって作られ、どこから運ばれてきたのかについての経緯は地元の人でもわかっていない。一方、御神体が現在存在せず、過去に存在したのかどうかも不明な水神があり、祠だけ残っているもの（写真8、福井地区、No. 12）や、水神祭の伝統が残っているもの（写真9、原地区、No. 1）があった。

その他、御神体は以前存在したが、岩屋地区（No. 7）と下郷地区（No. 10）のように、何らかの理由で行方不明になったものや、写真10（日田市

表2 東峰村とその隣接地域の水神の属性

No	地域	水神の有無	御神体の形態	谷筋の有無	土砂災害		備考	写真No
					危険箇所	警戒区域		
1	原	—	御神体の有無不明	—	土石流危険区域	土石流	近くに溪流がある。	9
2	鶴	○	不動明王 縦約40 cm × 横約20 cm	○	土石流危険溪流	—	現在は不動明王に変わった。水神は砂防堰堤の上流側にある。	5
3	桑鶴	○	単独の石	○	—	—	大肥川（鉾川）の近傍に祀られている。	1
4	竹布	—	谷筋氾濫による流出（石）	○	—	—	水神が砂防堰堤の下流に存在している。平成29年7月九州北部豪雨で流失したと考えられる。	—
5	葛生	○	弁財天 縦約20 cm × 横約20 cm	—	—	土石流	弁財天が水神として祀られている。大肥川が近くを流れている。	6, 7
6	平	○	複数の石	—	地すべり危険箇所	—	上流部にため池、井戸がある。	—
7	岩屋	—	消失（弁財天？八大龍王？）	○	土石流危険溪流	土石流 急傾斜地の崩壊	ひょうたん池に水神が祀られていたとされる。岩屋神社内に祀られていたが現在消失している。消失理由は不明。	—
8	栗林	○	複数の石	○	急傾斜地崩壊危険区域	土石流	2つの谷の合流地点に水神が存在する。以前より高い位置に移転した。水神は砂防堰堤の下流側にある。	2
9	松山	—	谷筋氾濫による流出（石）	○	—	土石流	平成24年7月九州北部豪雨で流された。	—
10	下郷	—	消失（形態不明）	—	急傾斜地崩壊危険区域	土石流	北山神社に過去祀られていたが、現在消失している。消失理由は不明。	—
11	原	○	石碑のような形態	○	土石流危険区域 地すべり危険箇所	土石流	個人が所有している。近傍を原川が流れている。	3
12	福井	○	御神体の有無不明	—	急傾斜地崩壊危険区域	急傾斜地の崩壊	福の井と呼ばれている。水神社とも呼ばれ、南側50 mほどの所にある福井神社の末社。	8
13	白岩*	—	谷筋氾濫による流出（石）	○	土石流危険溪流	—	近傍に白岩川が流れる。水神が砂防堰堤の上流にある。平成24年7月九州北部豪雨で流された。神社内に祀られていた。	10
14	清水本*	○	石と木像	—	急傾斜地崩壊危険箇所	—	近傍に岩戸川が流れる。過去の水害でも流されずに残っている。若八幡宮内に祀られている。	4

*は大分県日田市。御神体の形態で「御神体の有無不明」とは、現在御神体がなく、過去に御神体が存在したかどうか自体も不明ものを示す。また、「消失」とは、消失理由はわからないが現時点で行方不明になっているものを示す。



写真1 水神祭でお供えされた桑鶴地区 (No. 3) の水神



写真2 栗林川近傍に祀られている栗林地区 (No. 8) の水神



写真3 個人宅に祀られている原地区 (No. 11) の水神



写真4 岩戸川近傍に祀られている清水本地区 (No. 14) の水神



写真5 鶴地区 (No. 2) の溪流沿いに祀られている水神 (不動明王)



写真6 大肥川沿いの用水路近くに祀られている葛生地区 (No. 5) の水神 (弁財天)



写真7 写真6の水神の隣にある天保2年と記された石碑



写真8 福井神社の末社として祀られている福井地区 (No. 12) の水神



写真9 水神祭で、ご飯の入った藁のカゴがお供えされている原地区 (No. 1) の水神



写真10 白岩地区 (No. 13) の土石流の痕跡 (丸が水神跡、矢印は河川の流下方向)

白岩地区, No. 13) のように, 谷筋の氾濫や土石流で流出したものもあった。消失してしまった現在, それらの形態についての詳細は不明である。

4.2 水神の立地特性

対象地域内で確認された水神の中で, 既に存在していない水神が6箇所を確認されている (表2)。本研究では, 御神体や祠がなくても, 過去に存在していたことが確認されている水神に関しては, 現存する水神と同様, ‘立地している’ とみなして解析に利用した。以上に基づいて, 水神の分布を調べてみると, 図2に示すように, 大肥川, 宝珠山川の周辺に水神が多く分布していることが

わかった。また, 水神の立地に関しては, 表2と図3に示すように, 14箇所中, 11箇所の水神が, 谷筋, 土砂災害危険箇所 (土石流危険区域, または, 土石流危険渓流), 土砂災害警戒区域 (土石流) のいずれかに含まれていることがわかった。

次に, 8つの水神が立地する7つの谷筋を対象にして, 土砂移動の形態と溪床勾配との関係を調査した。図4に地区ごとの谷筋が持つ溪床勾配のヒストグラムを示す。ここでは, 図4の右上に示される土砂移動の形態の目安²⁸⁾を使って溪床勾配を分類する。その目安 (図4の①~⑤) によると, 溪床勾配が15度よりも急な場合は, 土石流の⑤発生区間, または, ④発生・流下区間に相当し, 緩

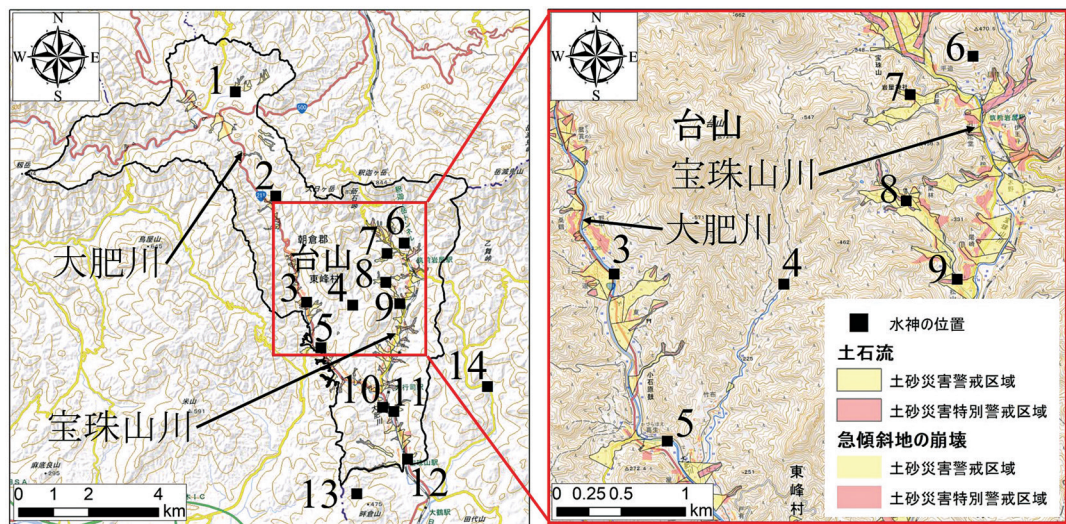


図2 東峰村とその隣接地域の水神の位置。図中の番号は表2の地点番号に相当する。右図は台山周辺の水神の位置を表す。

やかな場合（2～15度）は、土石流の③流下・堆積区間、または、②堆積区間に相当する。以上の目安を使って水神近傍の7つの谷筋の溪床勾配を分類した。その結果、どの谷筋も、土石流の⑤発生区間、または、④発生・流下区間を含んでいる。そして、台山近傍にある桑鶴地区の谷筋以外は、土石流の③流下・堆積区間と②堆積区間の合計の割合が大きく、図3、4で確認できるように、水神は土石流の②堆積区間に最も多く立地している（6箇所）。

以上の結果から、水神の多くは、谷筋の氾濫だけでなく、土石流に巻き込まれて埋没する危険性のある場所に立地していることがわかった。実際、既に溪流の氾濫や土石流で流失し、現在は存在していない水神が3箇所確認されている。松山地区（No. 9）と白岩地区（No. 13）の水神は、平成24年7月九州北部豪雨の際に流失している。また、平成29年7月九州北部豪雨の際にも、白岩地区（No. 13）の水神跡近辺で土石流が発生し、水神が祀られていた神社の一部が流出した（写真10）。同時期に、竹布地区（No. 4）の水神も流失したことがわかっている。

5. ヒアリング調査に基づく水神の特徴

3.2節に従い、地域住民に対して、水神の伝承や役割などを聞き取る調査が実施された。その結果、4箇所の水神（原、桑鶴、葛生、白岩の各地区）に関して貴重な情報が得られた（表3）。そのヒアリングを通して、水神に関して詳しい情報を提供して頂いた方は、桑鶴地区を除いて、水神管理人や水神祭主催者であり、居住歴50年以上の年配の方であった。以下にヒアリングで得られた各地区の水神の特徴について述べる。

原地区（No. 1）では、ご神体は無いが毎年4月25日にお祭りを実施しており、100年以上の歴史がある。そのお祭りでは、藁でカゴをつくり、その中にご飯を入れ、地域の溪流に祀っている（写真9）。水田に水を入れる際に願いを込めて祀っていることから、農業に関連した水神であることがわかる。

桑鶴地区（No. 3）の水神は、前を流れる大肥川の安全祈願や水に関わることで祀られているという。毎年4月15日にお祭りを実施しており、水神市と呼ばれている。以前は各地から相撲取りが訪れて高木神社で相撲が行われ、沿道に出店が出るなど大変に賑わっていたという。しかし、最近では、少子化の影響もあり、相撲もなくなり、お供え物

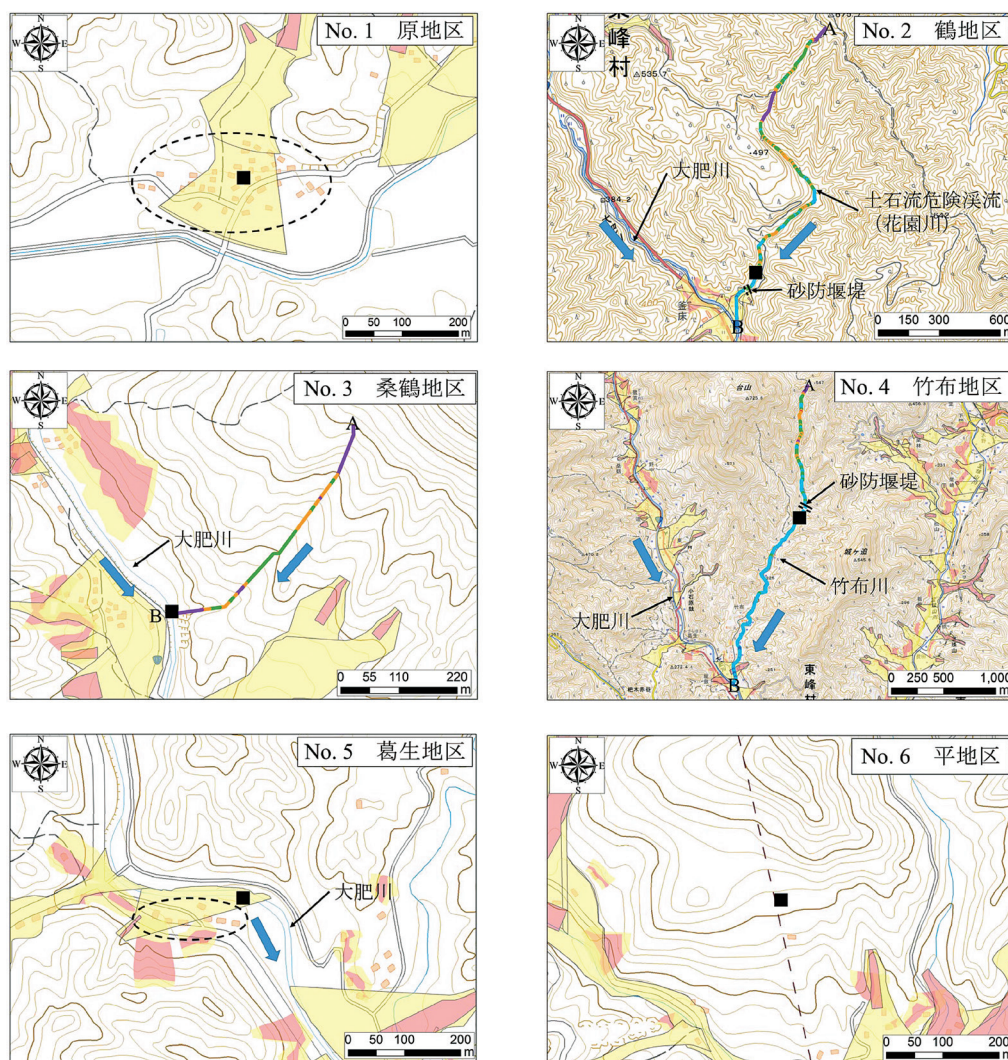


図3 各地区の水神周辺の地形的特徴（土砂災害警戒区域，土石流危険渓流，谷筋，尾根，砂防堰堤など）。図中A→Bは水神が立地している谷筋に相当する。

をした後に拝むのみになった（写真1）。

葛生地区（No. 5）では、弁財天が用水路近くに水神として祀られている（写真6）。その隣に、天保2年と記された石碑もあった（写真7）。ヒアリング調査から、天保年間に台山が崩れた際に大肥川が氾濫して田が流され、その後用水路が復旧した際に水神が祀られたという言い伝えが残っている。そのため、葛生地区の水神は大肥川の水害と関連していると考えられる。

白岩地区（No. 13）では、水神の祠が平成24年7月九州北部豪雨で流失していた（写真10）。また、水神を祀らないと災害が起こるという認識を住民が持っていることから、水神は災害から守ってくれる存在であると考えていることが伺える。さらに、田植えが終わった際、地域の方が水を頂きに水神碑を訪れる慣習があったことから、その水神は、災害だけでなく、農業にも関連すると考えられる。

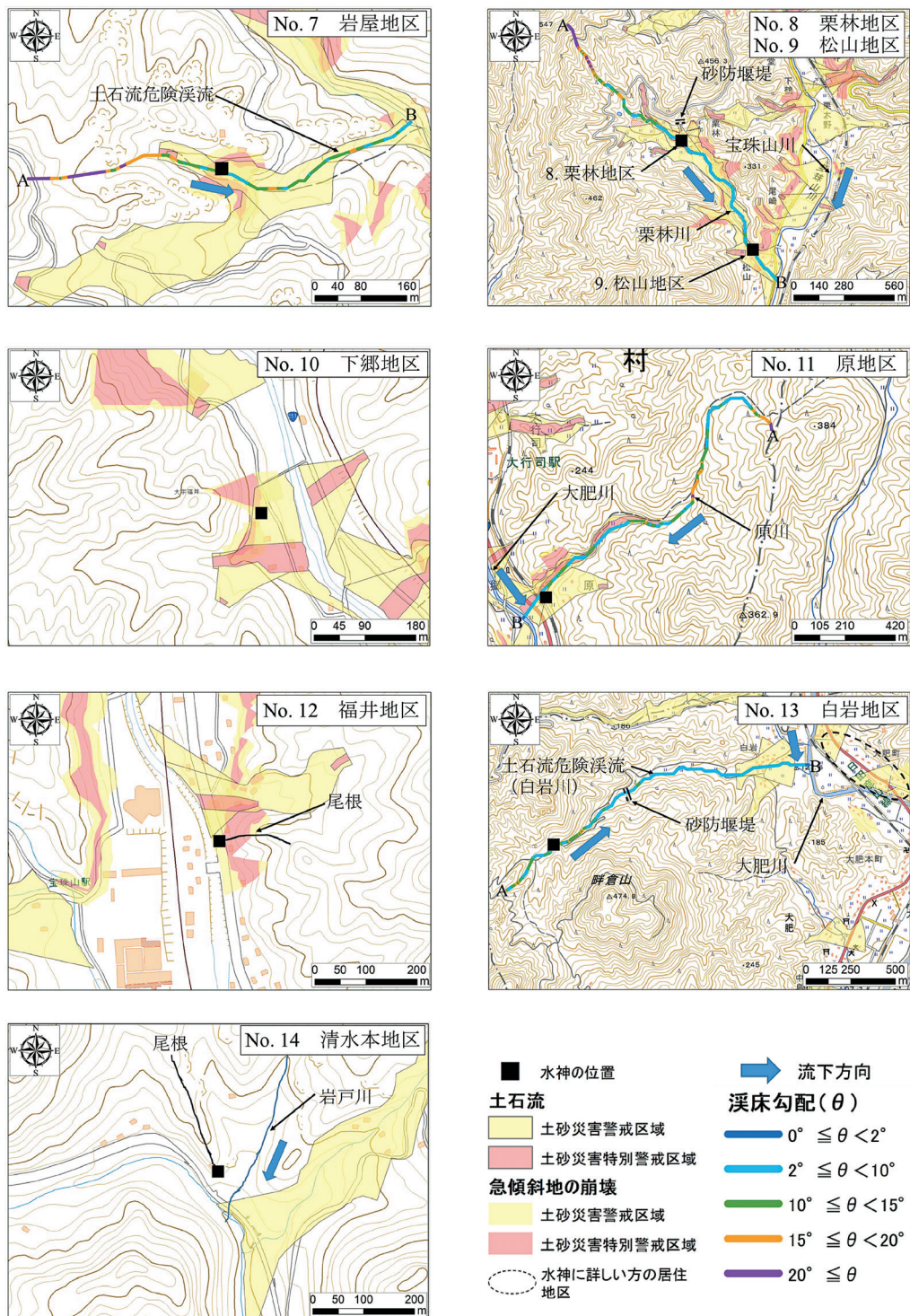
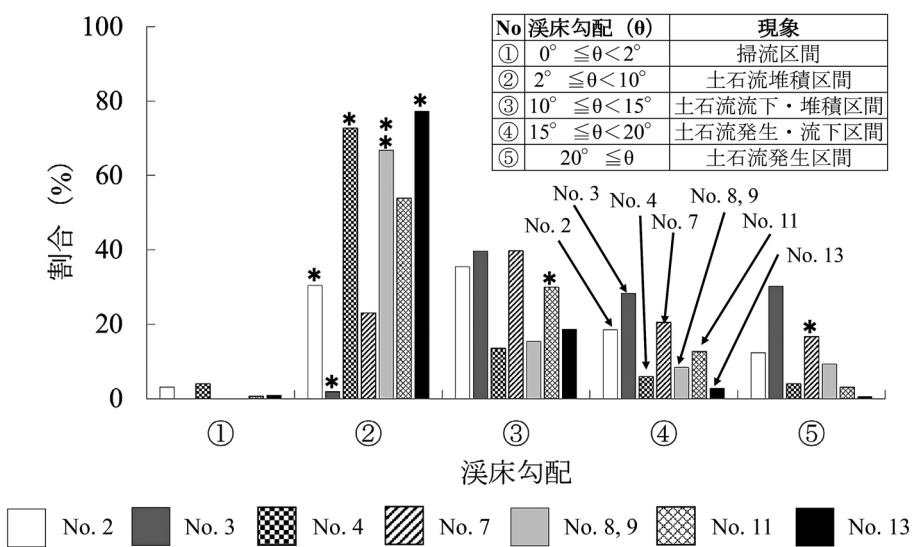


図3 続き



No. 2 鶴地区, 花園川, 全長1885m No. 8,9 栗林地区, 松山地区, 栗林川, 全長2027m
 No. 3 桑鶴地区, 全長533m No. 11 原地区, 原川, 全長1666m
 No. 4 竹布地区, 竹布川, 全長3321m No. 13 白岩地区, 白岩川, 全長2017m
 No. 7 岩屋地区, 全長718m

図4 谷筋が存在する地区の溪床勾配のヒストグラム。図中の勾配区分の数字①～⑤は溪床勾配の範囲を示し、土砂移動形態の目安を与える。また、図中にある*は、水神が立地している地点の勾配がどの範囲に入っているかを示す。

表3 ヒアリング調査で証言が得られた4箇所の水神に関する情報

No	地域	水神の有無	ヒアリング情報	地区の水神に詳しい方
1	原	—	- 水神の祠はない。 - 田植え前の毎年4月25日に水神祭が100年ほど前から実施されている。 - 藁のかごにご飯を入れ、お神酒を持って行き、地区内の溪流に祀る。 - 地区の人々は川に水神がいてと認識している。 - 豊作への願いを込め祀っている。 - 水神への恐れがない。 - 平成29年7月九州北部豪雨では、水神を祀る溪流が氾濫した。	水神祭主催者 (70代, 女性, 原地区在住, 居住歴70年)
3	桑鶴	○	- 高木神社で、水神祭が毎年4月15日に行われている。 - 水神祭は5地区くらいで持ち回りで実施している。 - 過去、高木神社で奉納相撲が行われた。 - 各地から相撲取りが来て、出店もでており、大変にぎわっていた。 - 祭は水神市と呼ばれていた。 3年ほど前から、水神祭は簡素化され、御供え物をして、拝むのみとなった。 - 大肥川の安全や水に関することで水神を祀っている。	
5	葛生	○	- 天保年間に、台山の崩壊と大肥川の氾濫により水害が発生し、田が流出した。 - その後、用水路の復旧工事の際、水神が祀られた。 - 現在は弁財天を水神として祀っている。	水神管理人 (70代, 男性, 葛生地区在住, 居住歴70年)
13	白岩	—	- 水神の祠は平成24年7月九州北部豪雨で流された。 - 田植えが終わったのちに、地域の人々が水をもらいに来っており、水の恵みという側面がある。 - 水神は怖い神様というイメージを地域の人々は抱いている。 - 水神を祀らないと災害が起こると考えると同時に、水神が災害から守ってくれると認識している。 - 水とり場のところにも簡単な水神を祀っていた。	水神管理人 (70代, 男性, 白岩地区在住, 居住歴56年)

一連のヒアリング調査を通して、川に向かって小便をすると水神に祟られるという証言や、水神には祟りがあるので、粗末に扱わず、塩やお神酒をお供えするという証言が得られたことから、水神を畏怖の対象と認識していることが伺える。一方、原地区（No. 1）では、そのようなイメージを抱いていなかった。その理由は定かではないが、水神が農業の恵みをもたらす役割を持っていることと何らかの関連があると考えられる。

6. 水神と災害の歴史的事実との関連性

本研究では、3.3節に従って、過去の災害に関する文献調査を通して東峰村の災害記録（表4、

5）を抽出し、前節のヒアリング結果を踏まえて、水神との関連性を調べた。江戸時代以前の災害については、主に『福岡県近世災異誌』¹⁹⁾から抽出した（表4）。その文献には、現在の東峰村が含まれる当時の筑前国の上座郡で起こった災害の記録が多く含まれているが、上座郡は広範囲であり、筑後川についての記述が大半であった。また、上座郡のみの記述では、東峰村の災害について十分に把握できない。そこで、上座郡だけではなく、東峰村近隣で当時の筑前国の夜須郡や嘉麻郡、豊前国についての記載があるものを東峰村で発生した災害として抽出した。

その結果、東峰村の過去の災害に関して、江戸

表4 現在の東峰村近隣地域で起こった江戸時代以前の災害記録。【 】は福岡県近世災異誌、及び、宝珠山村誌に収録された古記録・古文書を示す。日付は新暦で示されている。

年号	東峰村の近隣地域	被害状況
1776年（安永5年） 7月9日	筑前国の上座郡宝珠山村	【ふもん品】 宝珠山村が大洪水となり、村中の急傾斜地で山崩れが発生し、山水が田畠に入った。そのため、田に虫が入り不作となった。
1831年（天保2年） 7月12日	筑前国の夜須郡大塚村 豊前国	【風説記一】 6月20日より降雨、7月12日に洪水が発生し、大塚村付近の道路が分断された。さらに、大塚村より下の村々で堤防が決壊した。 【津野年代尽日記】 豊前国では、7月3日に大雨が降り洪水が発生し、7、8日も大雨洪水が発生した。また、9日朝出水、昼は曇り時々雨、10日14時少雨、11日朝6時に大雨が降り、12日朝に洪水が発生した。
1838年（天保9年） 8月16日	筑前国の上座郡、嘉麻郡	【黒田御家事記変災之巻四】 ・筑後川で8月16日に洪水が発生し、筑後川沿いの上座郡の村々で決壊等の被害が生じた。 ・上座・下座・嘉摩・穂波4郡にある3つの地域では、洪水による破損被害と田の浸水が発生した。 ・上座郡宮野地区の被害：堤防決壊15ヶ所、田への砂の流入数ヶ所、水車の流失2ヶ所、石橋の流失4ヶ所、石井手流失1ヶ所、土橋流失3ヶ所 【山踊并年吉凶記、加瀬記録】 ・上座・下座・夜須・御笠・那河・博多では道路の破損が多数あった。 ・上座郡等は1802年（享和2年）以来、37年ぶりの洪水と言われた。
1840年（天保11年） 7月3、7日	筑前国の上座郡、嘉麻郡	【黒田御家事記変災之巻四】 ・上座下座両郡（7月3日の被害）：田のえぐれ、砂の流入5町程、田への浸水、苗の腐敗50町程、筑後川の堤防決壊と半崩15ヶ所、境目筋の堤防決壊11ヶ所、小河川での堤防の決壊と半崩25ヶ所 ・嘉麻郡：田畑への土砂流入、洪水による決壊、苗の腐敗数千百三十四町程、堤防の決壊、崩落破損27ヶ所、道路の破損13ヶ所、川の堤防決壊と半崩279ヶ所、山々斜面崩壊2925ヶ所程、死者8名 【風説記二】 7月7日夜、嘉摩で洪水が発生。東千手・泉河内・才田・八反田川で船の多くが流された。また家2軒、牛1頭が流失した。 【山踊并年吉凶記、年暦算】 ・嘉麻・穂波・上鞍手・遠賀郡で大洪水が発生し、かまど山（宝満山）では土石流が発生した。 ・嘉摩大分村では斜面崩壊により酒屋が打ち崩され、家の中にいた16名中15名が死亡した。さらに屋外にいた牛馬も被害を受けた。こういった被害が多く報告されていた。 ・福岡で10万石の損失、死者は100名程度であった。

時代以前で4件、明治時代以降で7件、合計11件の事例を抽出した。その内2件は、平成24年7月、及び、平成29年7月九州北部豪雨による災害である。そこで本節では、ヒアリング調査から災害と

関連するという証言が得られた桑鶴地区 (No. 3) と葛生地区 (No. 5) の水神を対象に、災害の歴史的事実との照合を通して、水神と災害との関連を調べた。

表5 現在の東峰村(旧小石原村・旧宝珠山村)で起こった明治時代以降の災害記録

年号	地域	被害状況
1889年(明治22年)	旧小石原村	【小石原村誌】 ・1度目の梶原の大崩が発生した。小石原村大字小石原では、7月4日午後10時より5日午前6時までの降雨により天ヶ谷ため池の堤防が破損し字原の前までの田畑が過半数流出した。 ・大字鼓では山間の溪谷より土石流が発生し土砂が鼓川に集まり、洪水が発生、川沿いの家屋1戸が流失した。その際、ツツラの瀬が全て浸水し、一帯が河原のようになり木城、川平地区で被害が発生した。 ・この災害後、大字鼓地区の住民により、毎年水神祭が行われる。祭の際に、奉納相撲が行われ、以来百年ほど続き、梶原の大崩が治まるよう、毎年4月15日に祈願が行われる。水神祭は竜神鎮魂の神事と言われ、高木神社の境内で行われる。 ・「代山(梶原)には大蛇が住んでいて、大蛇が怒って山が崩れたときは鼓谷は水の底に沈む」という昔からの言い伝えがある。水神本体は桑鶴字川平の大杉の下に存在する。
1930年(昭和5年)	旧小石原村	【小石原村誌】 2度目の梶原の大崩。台風による集中豪雨で大肥川(鼓川)全体が大洪水となった。1度目の梶原の大崩れが発生した箇所も崩壊した。その後、1936年から砂防工事が始まり、1944年に施設が完成した。
1945年(昭和20年)	旧小石原村、旧宝珠山村	【小石原村誌、宝珠山村誌】 ・3度目の梶原の大崩が発生して、砂防施設とその完成記念碑が破壊された。その際に発生した土石流が鼓川をせき止め、対岸の県道(現国道211号線)や水田に達し、県道が流出し、交通が遮断された。 ・その後再び大雨が発生し、県道沿いの建物が水没し、鼓小学校の施設が倒壊埋没した。また、下流側の川平地区の堤防が決壊して、水田が殆ど流出した。 ・大崩れは2年ほど続き、6～8日間ほどの大岩石が増水した鼓川をせき止め、水は上流へと逆流した。 ・「川の水が低いところから高い上流へと流れ、その大音響は3kmも離れた鶴地区まで達した」と語り継がれている。
1953年(昭和28年)	旧小石原村、旧宝珠山村	【小石原村誌、宝珠山村誌】 6月24日から5日間、降り続いた大雨により、西日本全域で大きな被害が発生、犠牲者は654名であった。鼓川流域に大きな被害があったという記録はないが、宝珠山村内各地では崖崩れなどが発生した。
1973年(昭和48年)	旧小石原村	【小石原村誌】 ・6月末に災害が発生した。午後8時ごろに下蔵貫の橋げた付近まで鼓川が増水していた。午後10時ごろには木城川の谷間より土石流が鼓川に向かって発生した。大肥川の濁流が国道を流れ、蔵貫橋の上を越えた。 ・下蔵貫にある事務所は全壊、送迎用のバスや工事用の車両等も破損、住宅には杉の丸太が突き刺さっていた。
2012年(平成24年)	東峰村 (旧小石原村・旧宝珠山村)	【気象庁、福岡県、内閣府】 ・平成24年7月九州北部豪雨。東峰村の被害状況は、床下浸水4棟、田の流出埋没0.60ha、畑の流出埋没0.10ha、道路被害8箇所、河川被害132箇所、がけ崩れ92箇所。 ・国道211号(東峰村塔の元)、国道500号(東峰村小石原)で、法面崩壊等が発生し、全面通行止めとなった。
2017年(平成29年)	東峰村 (旧小石原村・旧宝珠山村)	【東峰村、利根川文化研究、筑後川右岸流域 河川・砂防復旧技術検討委員会報告書】 ・平成29年7月九州北部豪雨。東峰村では、死亡者3名の人的被害が発生した。 ・大肥川の氾濫や流木、土石流などにより国道211号や川沿いの農地などが被害を受けた。 ・宝珠山川の氾濫で多くの家屋が倒壊し、孤立した集落も存在した。 ・JR日田彦山線岩屋駅の線路敷が流出し、大行司駅の駅舎が倒壊した。

6.1 桑鶴地区 (No. 3) の水神

桑鶴地区の水神は、大肥川に沿った川平地区に祀られている(図5)。ここでは、東峰村における明治時代以降の災害の記録を示す表5に基づいて、桑鶴地区を含む大肥川沿いの地域(大字鼓)の災害の特徴を明らかにする。東峰村では、平成29年7月九州北部豪雨の際、死者3名、負傷者2名の人的被害に加え、土石流による家屋の流出や浸水などの甚大な災害となり、大肥川沿いの地域でも、流木を伴った大肥川の氾濫や土石流の発生で国道や農地が大きな被害を受けた。明治時代まで遡ってみると、過去の災害の特徴と類似していることがわかる。即ち、その地域では、その両側にある山岳の谷筋からの大量の雨水と土石の流入、それに伴う大肥川の氾濫によって、過去に何度も災害が起きてきた。また、大肥川の氾濫とともに、梶原地区にある谷筋の上流の斜面崩壊とそれに伴う土石流が明治時代以降に3回も発生し、近隣地域で深刻な災害を引き起こしている。その発生箇所は、地元の方への聞き取り調査によると、図5の谷筋2の上方と推定される。『小石原村誌』²¹⁾には、その崩壊を「梶原の大崩(崩壊)」と表現しているので、これ以降、その表現を使うことにする。

梶原の大崩は、明治時代以降の記録によると、1889年(明治22年)の豪雨で発生し、対岸の木城地区とその下流の川平地区で深刻な被害を受けた。その後、1930年(昭和5年)にも2回目の梶原の大崩が発生したため、1936年から8年をかけて砂防工事を実施したが、1945年(昭和20年)にも再び発生して、砂防施設とその完成記念碑が破壊された。その後2年間も梶原の大崩が断続的に続き、斜面が崩壊するたびに、谷筋で土石流が発生して河道閉塞(大肥川の堰き止め)を引き起こし、対岸の県道、建物、水田などを破壊し、近隣地域に深刻な被害をもたらした。

以上のように、桑鶴地区を含む大肥川沿いの地域の災害は、「大肥川に注ぐ谷筋の土石流」、「梶原の大崩」、「大肥川の氾濫」によって特徴付けられる。表4が示すように、その様子を記した江戸時代以前の資料は見つからないが、長い歴史の

中で繰り返し起こってきた可能性が十分考えられる。そこで、梶原の大崩を引き起こした谷筋を有する台山を対象にして、土石流が発生しやすい地形的な特徴を持っているかどうかを調べた。ここでは、梶原地区から台山頂上へ続く主な6つの谷筋1～6の溪床勾配を分類した。

その結果、全ての谷筋の合計で、土石流発生の目安となる15度以上の溪床勾配を持つ割合が86%を占め(図5, 6)、梶原の大崩を引き起こした谷筋2も91%に達することがわかった。また、台山の谷筋は、他地区の水神が存在する谷筋と比べても溪床勾配が大きいことがわかる(図7)。さらに、水神が祀られている桑鶴地区の谷筋も、急峻な台山周辺に位置していることから、他地域の谷筋に比べて大きな溪床勾配を持つ割合が大きい(図4, 7)。以上のように、台山は、土石流の発生しやすい地形的な特徴を持っていることから、記録が見つからない江戸時代以前から、梶原の大崩などが引き金となって台山の土石流が繰り返し発生してきたと推定することができる。

以上示した災害の歴史的な背景の中で、桑鶴地区の水神が、1889年に起こった梶原の大崩を契機に建立され、それを鎮めるために祈願(龍神鎮魂の神事)が行われるようになった(表5)。また、前節のヒアリング結果で、桑鶴地区の水神は大肥川の安全祈願のために祀られているという証言が得られたが、梶原の大崩が大肥川の氾濫を引き起こしてきたという歴史的事実から、その水神は、梶原の大崩だけではなく、大肥川の氾濫を鎮めるために存在していると考えても差し支えないだろう。

さらに、『小石原村誌』²¹⁾によると、「台山(梶原)には大蛇が住み、大蛇の怒りで山が崩れたとき、鼓谷は水の底に沈む」という言い伝えが残っている。その中で、鼓谷とは、地域住民によると大肥川のことを指す。従って、その言い伝えは、台山周辺で梶原の大崩などが引き金となって発生した谷筋の土石流が大肥川を氾濫させたことを意味する。ここで蛇というキーワードが出てくる。木曾谷の蛇拔など、江戸時代以前から、蛇が土石流と繋がっている言い伝えが全国的に数多く残ってい

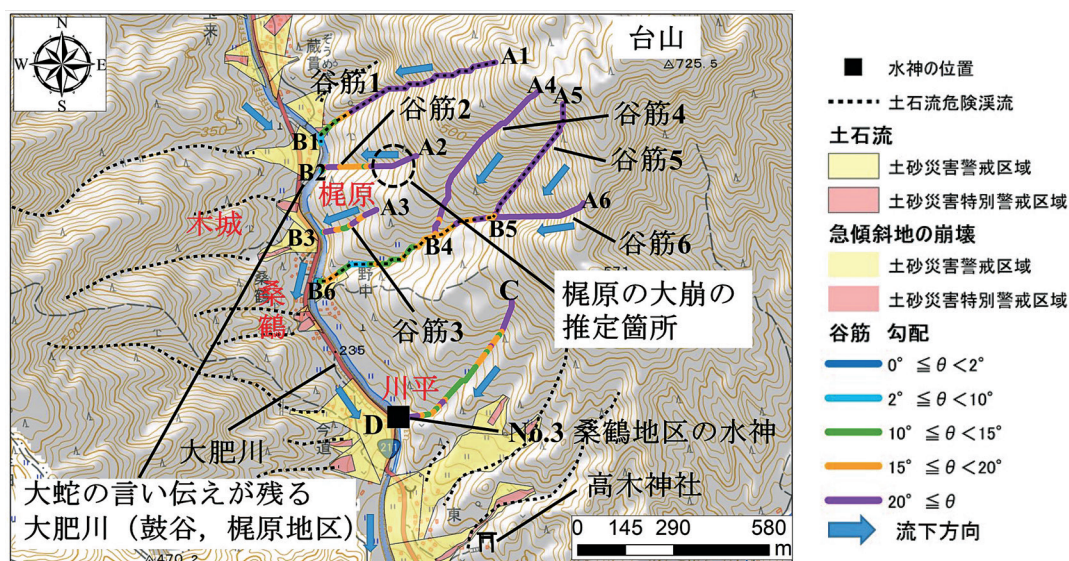


図5 台山山頂に続く6つの谷筋(A→B)、及び、桑鶴地区の水神がある谷筋(C→D)の位置とその溪床勾配、大字数は図中の大肥川に沿った地区全体を示す。

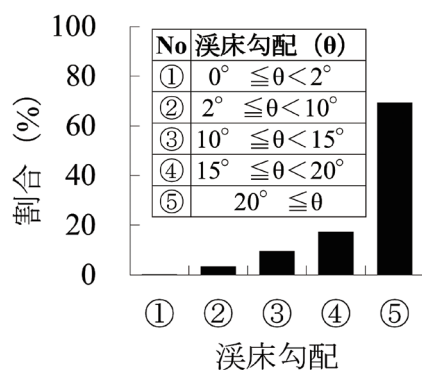


図6 台山頂上に続く6つの谷筋の溪床勾配のヒストグラム(6つの谷筋の合計)

る²⁹⁾。

土石流に関する大蛇の記述は、東峰村の台山だけでなく、その近隣地域で、筑後川の南側に位置する耳納山地にも残っている。耳納山地も台山と同様に急峻な斜面と谷筋を持ち、歴史的に土石流災害が多い地域¹⁹⁾である。1720年(享保5年)、東西に延びる耳納山地に沿って大規模な土石流(現地では山汐と呼ばれる)が発生し、山麓の多くの村が被災した。その一つの益永村では、石や

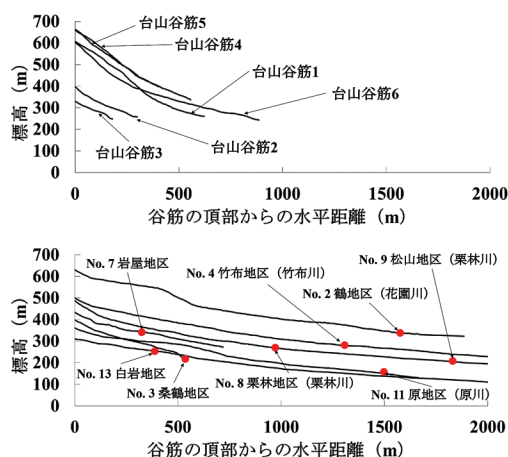


図7 台山山頂に続く6つの谷筋の標高(上図)、及び、水神が祀られている、または、水神跡がある各地区の谷筋の標高(下図)。赤丸は水神の位置を示す。

砂、流木が襲ってきて小山を築き、田畑、家屋が流された。その際、被災現場で動いている頭と尾がない大蛇を見て、気味の悪い思いをする人々の様子をお上（当時の久留米藩と推定）に報告したことが古記録『壞山物語』³⁰⁾に記されている。以上のように、急峻な地形を持つ台山、耳納山地は、

歴史的に土石流災害を繰り返してきた地域であることから、当時の人々の中に、土石が谷筋上流から流れ出す様子を大蛇の仕業と結びつける意識が存在していたことが伺える。

6.2 葛生地区 (No. 5) の水神

葛生地区には「天保2年」と記された石碑(写真7)が水神の隣にあり、前節で示したように、水神の建立は天保年間の災害に関係しているという証言が得られた。そこで、『福岡県近世災異誌』¹⁹⁾を使って1830年(天保元年)と1831年(天保2年)の災害記録を調べたところ、石碑に記された「天保2年」に現在の東峰村に隣接する豊前国や筑前国夜須郡で洪水が起こっていたことがわかった(表4)。当時、夜須郡大塚村(東峰村の西側)では、新暦7月12日に洪水が発生して道路が分断され、大塚村の下流側の村々では堤防が決壊した。一方、豊前国(東峰村の北東側)では、新暦7月3日と8日に大雨で洪水が発生し、9～11日にも大雨が降って12日に洪水が発生した。

1831年(天保2年)の災害は、現在の東峰村が含まれる上座郡の記録にはないが、近隣の夜須郡大塚村や豊前国で大雨、洪水が発生したという記録があることから、現在の東峰村に相当する地域でも、当時の豪雨の影響を受けて災害が発生していた可能性がある。従って、東峰村の葛生地区に祀られている水神は、前節のヒアリング結果も考慮すると、言い伝えとして残る天保2年当時の大肥川の氾濫と、その際に同時に起こったと推定される台山の土石流に関連していることが伺える。

7. 水神に持たせる防災上のメッセージ

水神には、一般的に、石碑と違って、文字情報としてのメッセージが残されていない。従って、水神を防災に活用できるようにするためには、地域の人々に理解しやすい防災上のメッセージを新たに作り出す必要がある。そこで、梶原の大崩の影響を受けてきた東峰村の桑鶴地区の水神を対象に、前節までに得られた結果に基づいて、水神に持たせる防災上のメッセージの内容について考察する。

前節の地形の解析で示したように、台山は急峻な谷筋を持っているため、江戸時代以前から谷筋の氾濫とともに土石流が繰り返し発生してきたと推定され、地域の人々にとって生命や生活の営みを脅かす深刻な出来事であったことは想像に難くない。そのような繰り返し起こる試練を通して、台山の土石流が「台山に棲む大蛇の怒り」と結び付き、大蛇の言い伝えとなって語り継がれてきたと考えられる。これは、地域の人々が長い歴史の中で経験し、獲得してきた地域の知恵や知見(地域知)に他ならず、台山の土石流の危険性を後世に伝えた大切な言い伝えと解釈することができる。

以上の背景と前節までの結果に基づいて、桑鶴地区を含む大肥川沿いの地域(大字鼓)における防災上の要点を整理すると次のようになる。即ち、1) 台山が土石流を伴って災害を引き起こしやすい地形的な特徴を持っていること、2) その理由で梶原の大崩などが引き金となって土石流が歴史的に繰り返し起こり、その結果として大肥川も氾濫してきたこと、3) そのような繰り返し起こってきた災害が「台山に棲む大蛇の怒り」となって代々語り継がれてきたこと、4) 明治時代以降の災害記録(梶原の大崩など)をリアルに表現して、将来再び災害に見舞われる可能性があることを後世に伝えることなどの内容にまとめられる。

以上の内容を使って防災上のメッセージを新たに作り出すことにより、桑鶴地区の水神が、台山に繋がる地域の災害の危険性を意識付ける役割と、その危険性を後世に伝える役割を持つようになり、地域の防災モニュメントとして水神を活用できるようになると期待される。

特に、梶原の大崩を引き起こしてきた谷筋2(図5)は、土石流の危険区域や危険溪流、土砂災害警戒区域(土石流)に指定されておらず、土石流の危険性を示すものが何も存在していない。また、過去の記録に基づいて考えれば、梶原の大崩は、今後も河道閉塞を引き起こし、その周辺地域に被害をもたらす可能性が大きい。従って、桑鶴地区の水神は、梶原の大崩の危険性を地域住民や後世の人々に伝える唯一の防災モニュメントになり得

る存在であり、防災に活用する価値のある重要な遺産として再認識することができる。

8. 結論

本研究では、筑後川の上流域で、平成29年7月九州北部豪雨の被害を受けた福岡県東峰村とその隣接地域に祀られる水神を対象に、現地調査から水神の立地特性を把握し、現地住民に対するヒアリング調査、及び、災害に関する歴史文献調査を通して、水神と災害との関連性を調べた。また、その結果に基づき、水神に持たせる防災上のメッセージの内容について考察した。その結果は以下の通りである。

- ①対象地域に立地する水神の約8割が、土石流を含む溪流の氾濫が起りやすい場所に立地していた。また、その原因で平成24年7月、または、29年7月九州北部豪雨の際に流失した水神もあった。
- ②水神は災害、または、農業に関連して祀られており、その両方の性格を持つ水神もあった。その中で、桑鶴地区と葛生地区の水神は、災害の歴史的事実と関連しており、台山の土石流と大肥川の氾濫から地域を守るために祀られていることがわかった。
- ③大肥川沿いの地域の災害は、「大肥川に注ぐ谷筋の土石流」、「梶原の大崩」、「大肥川の氾濫」によって特徴付けられる。大肥川の東側に聳える台山は、土石流が発生しやすい地形的な特徴を持っていることがわかり、江戸時代以前から土石流が繰り返し発生してきたことが伺える。そのことが、代々、地域の人々の意識の中で、「台山に棲む大蛇の怒り」と結び付き、災害の危険性を訴える大切な言い伝えとなって桑鶴地区に語り継がれたと推定することができる。
- ④大肥川沿いの地域を対象にして、防災上の要点を整理すると、土石流が発生しやすい台山で災害が繰り返されてきたこと、そのことが大蛇の言い伝えとなって語り継がれてきたこと、そして、梶原の大崩などがきっかけとなって発生した過去の災害の特徴を後世に伝えることなどの

内容にまとめられる。それらの内容を桑鶴地区の水神のメッセージに持たせることによって、台山に繋がる地域の災害の危険性を意識付け、その危険性を後世に伝えることが可能になると考えられる。以上を通して、地域特有の災害に対する防災モニュメントとして水神を活用することが期待できる。

水神が一般的に文字情報としてのメッセージを持っていないことから、水神の防災への活用を具体的に進めるためには、地域の防災に役立つメッセージを新たに作り出す必要がある。従って、本研究で実施したように、水神の立地特性を踏まえ、水神の性格や建立経緯、言い伝えなどについて、地域住民から可能な限り聞き取りを行い、地域に残る古文書や古記録などから災害歴史資料を探し出し、それらの情報を水神のメッセージに持たせることが重要である。また、メッセージの活用の際には、その内容が地域を反映したものになっているかどうかを地域住民から意見を頂くことも忘れてはならない。

その後の具体的な取り組みとしては、1) 防災のメッセージを添えた看板を現地の水神近傍に建てることや流出した水神の再建を行うなどして、防災モニュメントとしての役割を水神に与えること、2) 市町村のHPへの公開や自然災害伝承碑への登録など、誰でも閲覧できるように電子情報化すること、3) また、それらを教材にした地域の災害学習会、地域の防災散歩イベント、防災教育、避難訓練等に活用することなどが挙げられる。

一方、東峰村を含め、国内の中山間地では過疎化と高齢化が深刻で、地域に残る水神や石碑などの遺産の建立経緯や、代々受け継がれてきた災害伝承、災害の経験や教訓などが風化する恐れがあり、近い将来途絶える危機に瀕している。それを防ぐための地域の取り組みとして、郷土の歴史や文化に精通した方々、市町村誌作成の関係者や経験者、地域防災に携わった経験のある方々、地域の災害に関心を持つ方々などが中心となって、市町村の協力を得ながら、過去の情報を持っていると考えられる地域の高齢者を対象にして聞き取り

調査を実施し、地域特有の災害の危険性を次世代に伝える仕組みを作ることが大事である。

謝辞

本調査の実施に際して、朝倉市と東峰村に多大な貢献をされている仲道光男様には、現地での水神の案内や地元の方々へのヒアリングの調整、地域の方々の紹介等をして頂きました。また、とうほうTVの岸本晃様にも、地元の方々を紹介して頂き、地域コミュニティの放送を通して、私たちの研究内容を紹介して頂きました。さらに、東峰村の水神調査では、現地の方々にヒアリングにご協力頂きました。ここに、調査に協力して頂いた朝倉市と東峰村の皆様に、深く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 小山耕平・熊原康博・藤本理志：広島県内の洪水・土砂災害に関する石碑の特徴と防災上の意義，地理科学，Vol. 72，No.1，pp. 1-18，2017.
- 2) 坂町史編さん委員会：坂町史 通史（考古～近代）編，広島県坂町，560p.，2013.
- 3) 藤本理志・小山耕平・熊原康博：広島県における水害碑の碑文資料，広島大学総合博物館研究報告，Vol. 8，pp.91-113，2016.
- 4) 井若和久・上月康則・山中亮一・田邊 晋・村上仁士：徳島県における地震・津波碑の価値と活用について，土木学会論文集 B2（海岸工学），Vol. 67，No. 2，pp. 1261-1265，2011.
- 5) 国土地理院，自然災害伝承碑，<https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi.html>，2019年10月1日.
- 6) 宇多高明・三波俊郎・星上幸良・酒井和也：2011年大津波の災害と被災を免れた神社，土木学会論文集 B3（海洋開発），Vol.68，No.2，pp. 43-48，2012.
- 7) 宮坂知成・中井 祐・尾崎 信：微地形と水害に着目した仙南平野の神社立地特性，景観・デザイン研究講演集，No.8，pp. 235-240，2012.
- 8) 中嶋伸恵・田中尚人・秋山孝正：水防意識に基づいた輪中地域の景観変容に関する研究，土木史研究論文集，Vol. 24，pp. 53-61，2005.
- 9) 平松登志樹：水神様の役割に関する研究，日本民族学，Vol. 193，pp. 192-201，1993.
- 10) 直江廣治：利根川流域における水神信仰，人類科学，Vol. 22，pp. 186-198，1969.
- 11) 高原三郎：大分の雨乞，高原三郎，pp. 299-318，1984.
- 12) 田主丸町誌編集委員会：田主丸町誌 川の記憶，田主丸町，第一巻，pp. 399-465，1996.
- 13) 民俗学研究所編：民俗学辞典，東京堂出版，pp.304-305，1951.
- 14) 高谷重夫：雨の神－信仰と伝説，民族民芸双書，305p.，1984.
- 15) 矢澤和宏：大井川流域における水神信仰の地域性，駒沢地理，Vol. 25，pp. 115-138，1989.
- 16) 安藤萬壽男編：輪中－その展開と構造－，古今書院，pp. 216-224，1975.
- 17) 鳥越皓之編：環境の日本史⑤ 自然利用と破壊－近現代と民族－，吉川弘文館，pp. 200-226，2013.
- 18) 建設省延岡工事事務所：水郷「のべおか」のまちづくり 水神さまガイドブック，建設省延岡工事事務所，1996.
- 19) 立石 磐：福岡県近世災異誌，福岡県近世災異誌刊行会，713p.，1992.
- 20) 宝珠山村誌刊行委員会：宝珠山村誌，東峰村，680p.，2010.
- 21) 小石原村誌編纂委員会：小石原村誌，小石原村，403p.，2001.
- 22) 気象庁，平成24年7月九州北部豪雨，<https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/2012/20120711/20120711.html>，2019年8月9日.
- 23) 福岡県，平成24年災害年報，第3章 平成24年の主な災害，http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/262209_52577325_misc.pdf，2019年10月18日.
- 24) 内閣府，平成24年7月3日からの大雨による被害状況等について，<http://www.bousai.go.jp/updates/h2407ooame/pdf/h2407ooame04.pdf>，2019年10月18日.
- 25) 東峰村：東峰村復興計画，40p.，2018.
- 26) 古賀邦雄：平成二十九年七月九州北部豪雨災害の特徴について－福岡県朝倉市・東峰村・大分県日田市－，利根川文化研究，Vol. 41，pp. 43-50，2018.
- 27) 筑後川右岸流域 河川・砂防復旧技術検討委員会：筑後川右岸流域 河川・砂防復旧技術検討委員会報告書，筑後川右岸流域 河川・砂防復旧技術検討委員会，130p.，2017.
- 28) 国土技術政策総合研究所 砂防研究室：砂防基本計画策定指針（土石流・流木対策編）解説，

- 国土技術政策総合研究所資料, No. 904, 2 節, pp. 6-37, 2016.
- 29) 齊藤 純: 怪異・妖怪文化の伝統と創造－ウチとソトの視点から (小松和彦編), 国際日本文化研究センター, 国際研究集会報告書, Vol. 45, pp. 247-267, 2015.
- 30) 作者不詳: 壊山物語, うきは市立浮羽歴史民俗資料館所蔵, 1720 (享保5年).
- (投 稿 受 理: 令和元年10月24日
訂正稿受理: 令和2年1月28日)

要 旨

本研究では, 平成29年7月九州北部豪雨の被害を受けた福岡県東峰村とその隣接地域に立地する水神を対象に, その立地特性を把握し, 現地住民に対するヒアリング調査, 災害に関する歴史文献調査を通して, 水神と災害との関連性を調査した。その結果, 約8割の水神が, 土石流を含む溪流の氾濫が起りやすい場所に立地していることがわかった。また, ヒアリングから得られた4つの水神は災害, または, 農業に関連して祀られており, 桑鶴地区と葛生地区の水神は, 台山の土石流と大肥川の氾濫から地域を守るために祀られていることがわかった。急峻な谷筋を持つ台山では, 歴史的に何度も土石流災害が発生してきたと推定できるため, 災害の危険性を訴える大切なメッセージが, 大蛇の言い伝えとなって桑鶴地区に伝わったと考えられる。以上の結果から桑鶴地区の水神が持つ防災上のメッセージの内容について考察すると, 大蛇の言い伝えを介して語り継がれた, 繰り返し起こる台山の土石流災害の特徴を水神のメッセージに含ませることによって, 水神が台山に繋がる地域の災害の危険性を意識付ける役割とその危険性を後世に伝える役割を持つようになり, 地域の防災モニュメントとして水神を活用することができるようになると期待される。